

都市計画部門——研究懇談会

ウォーカブルシティに向けたアーバンストリートの統合デザイン

ランドブレイン株式会社

石村 壽浩

本研究懇談会は、2022年9月8日(木)13:45～17:15に開催された。司会は松浦健治郎(千葉大学)、副司会は長聡子(西日本工業大学)、コメンテーターは内田奈芳美(埼玉大学)が務めた。

——主旨説明

樋口秀(新潟工科大学) 特に地方都市においては、ウォーカブルな環境整備だけではなく、アーバンストリートのトータルデザインが必要。本研究懇談会では、①拠点を活かすウォーカブルな空間デザインとは何か?②ウォーカブルな空間や環境をどう評価するのか、その効果を伝えるのか?について、都市環境学、統計学、交通工学、環境・防災、予防医学の各観点から検討したい。

——主題解説

都市環境工学の視点から | 瀬戸口剛(北海道大学) 札幌市での研究成果をもとに、積雪関連都市の気温と行動の変化を紹介し、歩きたくなる環境には、気候や環境快適性を考慮したデザインの必要性を指摘。さらに、ウォーカブルな歩行空間デザインに向けて、歩行機能、安全性、アクセシビリティ、楽しさ、美しさ、気候への

対応、季節のデザインの7つのポイントを提言。

アーバン・サイエンスの視点から | 吉村有司(東京大学) ビッグデータと人工知能(AI)が及ぼすまちづくりへのインパクトの観点から、パルセロナの歩行者空間化政策(スーパーブロック)の効果を示し、歩行者空間化の検証の必要性を指摘。ウォーカブル施策の推進にあたって、データの可視化による合意形成技術、ビッグデータを用いて居心地のよい都市空間につながる技術などの課題を提言。

交通工学の視点から | 牧村和彦(計量計画研究所) 交通量ではなく人で評価する計画への転換、多様なモビリティによる交通政策と駐車政策の一体化等を提言。ウォーカブルに向けては、道路施設の組み合わせによるモビリティハブを包含したストリートデザインが重要。車や人の行動変容により街路空間が変わっていないことが問題であり、安全を第一としたストーリー・デザイン基盤が重要性を提言。

環境・防災の視点から | 福岡孝則(東京農業大学) グリーンインフラ(GI)の海外・国内の動向から、グリーンストリート(GS)＝環境性能をもつアーバンストリートの実装を提言。実装

へのアプローチとして、都市整備・計画策定等の機会活用、プロジェクトからの展開等により、地方都市ならではの自然環境とウォーカブル空間の融合を提言。

予防医学の視点から | 花里真道(千葉大学) 歩道×認知症、人のつながり×健康など、ウォーカブルな環境と疫学研究の関係から健康を支援するゼロ次予防の重要性を指摘。柏の葉におけるガイドラインの策定や距離表示サイン・気づきサインなどの社会実装の事例を示し、身体活動の向上に向けたウォーカブルアーバンストリート、社会活動の向上に向けたソーシャルなアーバンストリートを提言。

——討論・まとめ

浅野純一郎(豊橋技術科学大学) ウォーカブルシティの観点から現在のストリートの課題や、統合デザインに向けた多分野の関係性、新しい可能性について討論。ウォーカブルな環境整備とは、建築やストリートを含め、交通や利用者の行動選好、防災や環境負荷をも踏まえた統合(重ね合わせ)的デザインである。実装に向けてマルチなデータ蓄積とその可視化、公共空間の民主的プロセスによる整備が求められる。